

宗教都市という城塞都市

昨年、平泉と小笠原諸島が世界遺産に登録され、日本の世界遺産は全部で十六個所になった。世界遺産になるには、日本だけでなく世界に通用するストーリーづくりが必要だが、日本にはまだまだたくさんの地域から声があがっている。今回の連載では、世界遺産をめざすが国の暫定世界遺産の土木建築面に焦点をあてて取材していく。まずは鎌倉である。

*

源頼朝が鎌倉に武家政権を築いて以来、わが国では京都を中心にした天皇政権（朝廷）と並立する二重構造となり、以後明治維新を迎えるまで七百年にわたって存続した。武家文化は日本文化に大きな役割を果たし、鎌倉は世界的にみると、中世の東アジアで特色ある都市を形成したといわれる。

源頼朝や後を継いだ北条氏は、方位の四神と地形とを対応させる都市づくりの四神思想を変えなかったが、都市構成や配置計画は古代都市とは大きく変えた。

まず都市自体を要害の地にするため、三方の山々を自然の城壁として利用するとともに、切岸と堀切という土木工事をおこなって、より城塞機能を高めた。切岸は、勾配のゆるい山の裾野部を断崖状にまっすぐ削り、敵の登攀攻撃を妨げる施設であり、堀切は、尾根筋を垂直に断ち切って敵の尾根筋での動きを阻む施設であった。切岸の土木工法は、狭い土地を有効活用するため城壁内の市街地整備でも広く採用された。山裾に位置する社寺仏閣の敷地をみるとよくわかる。山裾を絶壁状に削り、削った土砂で谷地を埋めて平地をつくる土地造成で、階段状につくられる。

城塞都市である鎌倉だが、外観的にはこれを意識させないようにつくられ、都市構成上は、宗教都市のようにみえる。平城京や平安京は、南北都市軸の朱雀大路の行きつく先は、政治権力の中枢である天皇御所であった。これに対し鎌倉では、精神的信仰的な中心を担う宗教施設の鶴岡八幡宮を配した（将軍御所は、この東隣に位置していた）。朱雀大路に相当する若宮大路は、頼朝が政子の安産祈願を願って一一八二年につくった参道であり、頼朝も土木作業に汗を流したといわれる。参道には、平地より一段高くなった段葛がつくられた。一段高くなったのは、ハレの場を演出する都市装置であるとしても



名越の大切岸

高さ10m・長さ800mに及ぶが、崩れたところもある。近年の研究では、石を切り出した石切場という説もある。

瑞泉寺庭園

切岸を発展させて岩庭とした。夢窓国師作。大きな洞（天女洞）を彫って水月観の道場とし、隣には坐禅をおこなう坐禅窟をうがった。池は貯清池と名づけ、池の中央を掘り残して島とした。鎌倉に残る鎌倉時代唯一の庭園。



若宮大路

段葛の側面に玉石を積み、梅・桜・つつじが植えられたのは、明治以降のこと。発掘調査で、道幅は現在の道路幅員より広い33.6m、両側に幅3m・深さ1.5mの側溝が設置されていたことが判明。



鶴岡八幡宮石段の上から若宮大路を望む

舞殿越しに三ノ鳥居・二ノ鳥居が見え、晴れた日には水平線や伊豆大島も望める。若宮大路がまっすぐに延び、鎌倉の都市軸であることが実感できる。



古都保存法発祥の地の顕彰碑

鶴岡八幡宮裏山の宅地開発に反対した住民運動が、古都保存法を生んだ。のちに町並み保存や近代化遺産などの歴史遺産の保存・保護に結びついた。日本版ナショナル・トラスト発祥の地ともいわれる。



日月やぐら

やぐらの名称は、やぐら内部の壁面に掘られた丸い穴を日輪に、二重に掘られた穴を月輪になぞらえて付けられた。丸い穴の上に天蓋が描かれ、下には蓮座が描かれており、鎌倉でも珍しいやぐら。



水面にわずかに顔を出している和賀江島

5月ごろの大潮だともっと潮が引いて、よく見える。1232年、勸進聖の往阿弥陀仏が工事を推進した。真鶴や伊豆から運んだ石を積み上げて築いた防波堤を兼ねたような船着場。奥に見えるのは江ノ島。



名越切通

当時の状態がもっともよく残っている切通といわれる。路面は、2mぐらい下にあり、道幅は2~3m。しかしそれが鎌倉時代の路面か否かは不明。

に、実用的な意味もあった。若宮大路一帯は湧水が多く、湿地帯だったので、ぬかるみをさげ、雨でも通れるようにしたのが、段葛だと思ふ。ついでにいえば政権もできたばかりで、盤石でない体制において、都市づくりのうちつつをぬかす訳にはいかない。安産祈願にかこつけて、幹線道路をつくらせたのではなからうか。

三方を山で囲むだけでは、交通の行き来を阻害する。山間の谷戸を切り拓いて七口の切通（極楽寺口・大仏口・化粧坂口・亀ヶ谷口・巨福呂坂口・朝比奈口・名越坂口）を整備した。切通の近くには社寺仏閣を配した。社寺は鎌倉を出入りする人を監視できるし、戦のときには境内が兵団の集結地にもなる。往来の激しい西の巨福呂の切通には、円覚寺や建長寺のように大きな伽藍をもつ寺院が建立された。とくに円覚寺は、蒙古襲来による死者の弔いの場であるとともに、未曾有の危機を克服した象徴的な施設でもあった。長谷の大仏は、奈良の大仏に対して新大仏とよばれ、鎌倉幕府の意気込みを示す象徴でもあった。

鎌倉を特徴づける「やぐら」とよばれる横穴式の岩穴墳墓が、周縁の崖につくられている。これは僧や武士の墓で、都市部における死体の腐敗臭などをさけるためにつくられ、庶民は浜の共同墓地に埋葬された。

また鎌倉の東西南北の国境として位置づけられていたのが、南は小坪（現・逗子市）、西は稲村ヶ崎、北は山内、東は六浦（現・横浜市）であった。小坪には和賀江島という湊があり、稲村ヶ崎には極楽寺があつて、鎌倉後期に活発な活動を展開した。現在の小規模な極楽寺とちがい、当時は律宗（戒律の研究と実践に重きをおく宗派で、鑑真が伝えた）の関東における最大拠点寺院で、寺院地も周囲に広がっていた。境内には癩宿・薬湯室などを設営し、当時の仏教界では顧みられることになった病人や非人たちの救済活動をした。極楽寺は、和賀江島と位置的には対極に位置するが、旧極楽寺境内からは和賀江島を見下ろすことができ、船の出入りをふくめ湊を監督するには絶好の場所を占めていた。土木工事もおこなっている。極楽寺の切通の開削をはじめとする道路整備、橋・湊の修築、和賀江島の修造責任をおこなう代わりに関所の設置・由比ヶ浜の殺生禁断権（漁業権）を認められ、大発展を遂げた。六浦の湊も抑えていた。鎌倉の二つの湊を抑えたことは律宗の勢力拡大に大きな意味をもっていた。

古都鎌倉の土木工事は、世界遺産登録に向けて、徐々に明らかになっている。

参考文献

- ・松尾剛次「中世都市鎌倉の風景」吉川弘文館、一九九三年
- ・高橋慎一郎「武家の古都、鎌倉」山川出版社、二〇〇五年
- ・秋山哲雄「都市鎌倉の中世史」吉川弘文館、二〇一〇年
- ・鎌倉市の世界遺産ホームページ
<http://www.shonan-it.org/kamakura/>

*最近の考古学・歴史学の進歩は、中世都市鎌倉をめぐって、諸説の展開を引き起こしている。